

〈研究報告〉

和歌山県における助産専攻科への進学に関するニーズ調査

Needs Assessment on Admission to Midwifery Education in Wakayama

福井早苗 近藤純子 辻久美子 福山智子 八島妙子

和歌山看護学部

Sanae FUKUI, Junko KONDO, Kumiko TSUJI, Tomoko FUKUYAMA, Taeko YASHIMA

Wakayama Faculty of Nursing

要 旨：目的：和歌山県内の周産期母子医療センターを設置する病院の看護師および看護学生の助産師資格の取得と助産専攻科への進学に対するニーズを明らかにする。
方法：和歌山県内の看護養成校に在籍する女子学生 1190 名と周産期母子医療センターに所属する女子看護職者 700 名を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。
結果：1486 名に調査票を送付し、614 名から回答を得た (41.3%)。今回の調査結果から、全体の約 2 割の対象者が助産師資格取得を希望しており、そのうち約 9 割が学生だった。助産師資格を希望している学生は、進学先の候補である助産専攻科の存在やその入学資格について把握しているものが有意に多く、さらに助産師になるために助産専攻科への進学を希望しているものが有意に多かった。
考察：対象者の約 2 割が助産師資格の取得希望しており他府県と比較しても低くなく、さらに進学を希望している人のほとんどは学生であることが再確認された。助産師資格を希望している学生は、その思いを叶えるために進学先の情報収集を行い、進学のための準備をすでに開始していることが明らかとなった。

Abstract：Objective: To clarify the needs for acquiring midwifery qualifications and entering a graduate program in midwifery among hospital nurses working in perinatal medical centers and nursing students in Wakayama prefecture.

Methods: We conducted an anonymous written questionnaire survey of 1190 female students of nursing schools and 700 female nursing professionals of perinatal medical centers in Wakayama prefecture and analyzed the questionnaire responses qualitatively.

Results: The questionnaire forms were sent to 1486 nurses/nursing students, of whom 614 returned the responses (41.3%). From the results of this study, about 20% of the subjects wanted to obtain a midwifery qualification, and about 90% of them were students. Many students who wish to become a midwife are aware of the existence of a midwifery major that is a candidate for admission and their admission qualifications, and further go on to a midwifery major to become a midwife. There were significantly more people who wanted.

Discussion: It was reconfirmed that about 20% of the subjects want to obtain midwifery qualifications, which is not low compared to other prefectures, and that most of the people who want to go on to higher education are students. It has become clear that students who wish to become midwives have already begun preparations for going on to higher education by collecting information on their destinations in order to fulfill their wishes.

キーワード：助産学専攻科、進学、ニーズ調査

Keywords：Midwifery Education, Entering Further Education, Needs Assessment

I. はじめに

現代の日本の周産期医療において、晩婚化、晩産化、少子化などを社会背景として、高度生殖補助医療に対するニーズは高まりハイリスクの妊産褥婦や重症児例の増加など周産期医療はますます高度化している。子育てを取り巻く現状においても、核家族化が進む中で育児不安や産後うつ、愛着障害、乳幼児虐待など問題は複雑化し、深刻化している。さらに、産科医師が不足し、それに伴う分娩取り扱い施設が減少しており¹⁾ 2)、妊産婦への医療の量と質ともに低下していく恐れがある。

このような社会の変化やニーズに対して、妊産婦やその後の子育てまでを柔軟に対応できる専門職者である助産師が大きな役割を担うことを求められている。特に施設助産師は院内助産や助産師外来を運営することで、正常産を助産師が担い、その活躍が社会的に認められはじめ、2018年には厚生労働省の特別事業として「院内助産・助産師外来ガイドライン2018」³⁾にてガイドラインの改定をしており、国を挙げての助産師の活躍を推進している状況である。

このような日本の周産期医療から質の高い助産師の育成が期待され、助産師教育を行う全国210校の助産師教育機関のうち大学院修士課程は36校、大学専攻科・別科で34校と全体の3割を占めており⁴⁾、10年前と比較して大学院は10倍、専攻科・別科では17倍となっており、大学教育における助産師教育の価値が高まっている。川村ら⁵⁾の調査では、3-4割の対象者が大学に大学院が併設されれば進学を希望し、同様に3-4割の対象者が大学に専攻科が併設されれば進学を希望すると答えており、大学院と同様に助産専攻科への進学に対する認識は高いことがわかる。静岡県⁶⁾や岩手県⁷⁾で行われた助産師教育のニーズに関する研究はあるが、近畿県内の都道府県規模での助産師教育課程の進学に関する認識は明らかにされていない。現在、和歌山県内において大学教育施設は助産専攻科が1校であり⁸⁾、新たな助産師養成所として助産専攻科1校が開設予定である。このように和歌山県での助産師教育は助産専攻科による教育が進んでいる状況である。

和歌山県は山村過疎地域を中心に医療の確保が困難なへき地が多くあり⁹⁾、分娩取扱施設は和歌山県内に18施設ありそのうち7施設が和歌山市に集中し、他の29市町村に9施設のみである¹⁰⁾。このような現状から、へき地医療で働く助産師に求められる実践能力や地域独自の課題を解決するための能力が求められる。和歌山県における一人一人の助産師としての能力を向上させることは重要な課題であり、その一つとして助

産専攻科での学びが大きな役割を果たすものと考ええる。

そこで本研究は、和歌山県内の周産期母子医療センターを設置する病院の看護師および看護学生の助産専攻科への進学に対するニーズを明らかにすることを目的に調査を行った。

II. 方法

1. 研究対象者の選択

対象者数：和歌山県内8校の看護養成校に在籍する女子看護学生（以下、学生）798名と和歌山県内の周産期母子医療センターを有する病院で働く女性看護職者（以下、看護師）688名とした。

2. 研究方法

- 1) 研究デザイン：量的記述的研究デザイン
- 2) データ収集期間は令和2年6月1日から10月30日であった。
- 3) 調査内容：先行文献（助産師教育課程に関連ニーズ調査の内容^{5) 6) 7) 11)~13)}を参考に学生用と看護師用の2種類を作成した。

(1) 基本属性：学生は年齢、所属区分、学年、助産専攻科入学資格の認知度とし、看護師は年齢、学歴、取得免許、経験年数、職位、助産専攻科入学資格の認知度とした。

(2) 助産専攻科への進学ニーズ：①助産専攻科の存在の認知と情報源、②助産師資格取得の希望、③助産専攻科への進学希望、④進学先を決定する際に考慮する条件、⑤新設の助産専攻科への進学、などとした。質問①~③は「はい」「いいえ」の2選択肢の回答、④は自由記述、⑤は「はい」「いいえ」「迷っている」の3選択肢で回答を求めた。

4) データ収集

学生は、看護養成学校では学校長へ研究についての依頼書を郵送し、研究依頼をした。その後、教員に研究対象者である学生へ研究依頼書を用いて依頼を行い調査実施の同意を得て、質問紙票・返信用の封筒とともに手渡してもらった。配布の際には対象となる学生に対し研究協力を強制しない旨を説明書に明記した。看護師は、病院長および看護部長へ研究の概要について説明し、看護部長の研究協力の承諾を書面にて得、看護部長から各病棟責任者へ関係書類を渡してもらうように依頼した。その後、病棟責任者に病棟または外来看護師へ研究依頼書を用いて依頼を行い対象者となる者の調査実施の同意を得て、質問紙票・返信用の封

筒とともに手渡してもらった。配布の際には対象となる看護師に対し研究協力を強制しない旨を説明書に明記した。研究対象者は研究協力の自由意思のもと、研究に協力をする意思がある場合のみ添付されている郵送封筒で返信してもらった。

5) データ分析

基本的属性については単純集計を行った。助産師教育（助産専攻科）への進学に関するニーズについて、SPSS Statics Ver.26.0®を用いて記述統計処理を行った。質問ごとに結果を単純集計し、群間の比較には χ^2 検定を用いた。自由記載の回答に関しては、Text Mining Studioを使用して単語頻度分析により主要語を抽出し、その主要語と他単語の関連性から意味内容を検討するため、ことばネットワーク分析で共起性を確認した。

Ⅲ. 倫理的配慮

対象に対して、調査目的と方法、調査協力は自由意思に基づくこと、調査に協力しないことによる不利益はないこと、調査は無記名で個人は特定されないこと、データは調査目的以外に個人は特定されないこと、結果の公表時には個人や施設が特定されないこと、質問紙の提出をもって同意の確認とすることなどを文書で説明した。本研究は東京医療保健大学のヒトに関する研究倫理委員会の承認（承認番号：教32-3A）を得て

行った。

Ⅳ. 結果

学生は8施設386名（63.0%）、看護師は1施設228名（37.0%）から回答を得、全回答数は614名（回収率は41.3%）だった。

1. 対象者の属性（表1）

年齢区分では、全体の95.8%が29歳までの年齢区分で占められていた（表1-1）。また、出身地では、和歌山県出身者は学生が360人（93.3%）、看護師は185人（81.1%）で、対象者の学生と看護師の8～9割が和歌山県出身者だった。

最終学歴は大学卒業（見込みを含む）が（253名）、専門学校生（2名）、看護師（16名）を合わせると268名（43.6%）で、看護専門学校卒（見込みを含む）が283名（46.1%）だった（表1-2）。

2. 助産師資格取得希望と助産専攻科の認知度・進学希望における対象者の所属による比較（表2）

助産師資格取得の希望、助産師専攻科認知度、助産専攻科入学資格の認知度、助産専攻科進学希望の4項目について、対象者の所属（看護大学生、専門学校生、看護師）により比較した結果を表2に示した。助産師資格取得を希望する人は126人（20.5%）であり、

表1 対象者の属性

		看護大学生 (n=253)	専門学校生 (n=133)	看護師 (n=228)
年齢(歳)	-29	251 (99.2)	119 (89.5)	76 (33.3)
	30-39	2 (0.9)	10 (7.5)	49 (21.5)
	40-49	0 (0.0)	2 (1.5)	67 (29.4)
	50-59	0 (0.0)	1 (0.8)	29 (12.7)
	60-65	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (2.2)
	無回答	0 (0.0)	1 (0.8)	2 (0.9)
最終学歴	大学(看護系)	250 (98.8)	2 (1.5)	16 (7.0)
	大学(看護系以外)	1 (0.4)	0 (0.0)	5 (2.2)
	大学院修士	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.9)
	看護専門学校	0 (0.0)	88 (66.2)	195 (85.5)
	看護医療短大	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (2.2)
	その他	1 (0.4)	40 (30.1)	2 (0.9)
	無回答	1 (0.4)	3 (2.3)	3 (1.3)
	出身地	和歌山県	237 (93.7)	123 (92.5)
その他	16 (6.3)	10 (7.5)	40 (17.5)	

表中の数値は、人数（%）を示す。

看護大学生、専門学校生では、それぞれ約3割を占めていた。看護師より学生に希望者が多く (P<0.001)、助産師資格取得を希望している者のうち、看護大学生と専門学校生が9割を占めていた。助産専攻科の認知度および入学資格に関する認知度では、助産専攻科を知っている人は342人 (55.7%)、入学資格について知っている人は338人 (55.0%) であり、助産専攻科の認知度、入学資格の認知度ともに5割を越えていた。また、助産専攻科への進学を希望する人は107人であり、看護大学生の約3割、専門学校生の約2割が助産専攻科への進学を希望していた。これらから、助産師教育への進学にかかわるニーズは大学生に多いことが分かった。

3. 助産師資格希望者における助産専攻科への進学希望 (表3)

助産師資格を取得希望の学生の準備状況をより詳細に把握するため、看護大学生と専門学校生において助産師資格の取得希望別に、助産専攻科の認知度と、助

産専攻科入学資格の認知度、助産専攻科進学希望の有無について、比較した結果を表3に示した。助産師資格の取得を希望しない学生に比べて、希望する学生のほうが、助産専攻科認知度、専攻科入学資格の認知度ともに、有意に高くなっていた (P<0.001)。助産専攻科への進学希望についても、有意に多くなっていた (P<0.001)。

4. 助産専攻科への進学を決める条件 (図1)

助産専攻科への進学を決める条件では、最も高かった助産専攻科への進学の条件は、看護大学生、専門学校生、看護師ともに学費、生活費などの「経済面」であり、対象者のほとんどで進学を検討する際に経済面の負担があることが明らかになった。ついでカリキュラム、実習病院、施設設備などの「教育環境」、利便性、和歌山県内であることなどの「通学」と続き、「その他」では学生では受験のむずかしさや奨学金の返済などで、看護師では年齢、若さ、仕事・家庭との両立などで、学生と看護師とでは相違点があった。

表2 助産師資格取得希望と助産専攻科の認知度・進学希望における対象者の所属による比較

		全体	看護大学生	専門学校生	看護師	P ^a
助産師資格取得の希望	希望する	126 (20.5)	85 (33.6)	36 (27.1)	5 (2.2)	<.001
	希望しない	480 (78.2)	164 (64.8)	97 (72.9)	219 (96.1)	
助産専攻科認知度	知っている	342 (55.7)	165 (65.2)	84 (63.2)	93 (40.8)	<.001
	知らない	265 (43.2)	86 (34.0)	49 (36.8)	130 (57.0)	
助産専攻科入学資格の認知度	知っている	338 (55.0)	148 (58.5)	90 (67.7)	100 (43.9)	<.001
	知らない	270 (44.0)	104 (41.1)	43 (32.3)	123 (53.9)	
助産専攻科進学希望	希望ある	107 (17.4)	75 (29.6)	27 (20.3)	5 (2.2)	<.001
	希望ない	498 (81.1)	173 (68.4)	106 (79.7)	219 (96.1)	

表中の数値は、人数 (%) を示す。

a: 所属間の比較には χ^2 検定を用いた。

表3 助産師資格希望者における助産専攻科への進学希望

		助産師資格の取得希望		P ^b
		希望する	希望しない	
助産専攻科認知度	知っている	99 (78.6)	240 (50.0)	<.001
	知らない	27 (21.4)	236 (49.2)	
助産専攻科入学資格の認知度	知っている	96 (76.2)	239 (49.8)	<.001
	知らない	30 (23.8)	238 (49.6)	
助産専攻科進学希望	希望ある	100 (79.4)	4 (0.8)	<.001
	希望ない	24 (19.0)	473 (98.5)	

表中の数値は、人数 (%) を示す。

b: 資格取得希望の有無間の比較には χ^2 検定を用いた。

5. 進学を決定する際に問題になること

1) 進学決定時の問題の有無

助産専攻科への進学を決定する際に問題となることの有無では、看護大学生が「問題ある」が60名(23.7%)、「問題ない」が173名(68.4%)だった。ついで専門学校生は「問題ある」が25名(18.8%)、「問題ない」が98名(74.0%)、看護師は「問題あり」が61名(26.8%)、「問題ない」が140名(61.4%)で、進学決定時に問題がないと回答したのは、学生は約7割、看護師は6割と過半数を上回った。

2) 進学決定時の問題の内容

進学時決定時の問題の内容で最も多かったものは、看護大学生、専門学校生、看護師ともに「経済面」であり、次いで看護大学生では「奨学金対応」、「受験」、「就学のための時間」であり、専門学校生は「通学」と続き、看護師は「家庭」、「職場」があげられていた。また、専門学校生、看護師では「その他」の意見は、年齢、体力、体調、時間の調整と続いた。

6. 和歌山県内に助産専攻科が設立されることへの期待(図2)

助産専攻科に対する意見の自由記載の内容について抽出された総行数は29行数だった。単語総数は137であった。単語の出現頻度では最も多く出現した単語は「助産師」と「助産専攻科」であった。以下の言葉ネットワーク分析は最小出現数を2とした。

1) クラスタ①:「助産専攻科」を中心とした共起ネットワーク

「助産専攻科」の周囲に「和歌山県内」「設立」とい

う単語が集まり、その周りに「ありがたい」「助産師学校」「少ない」「1校」などが集まっていた。原文から“和歌山県内に助産専攻科が1校しかない”“和歌山県内に助産専攻科が新設されるのはありがたい”など、和歌山県内に助産師養成校の少なさから新設される助産専攻科への期待からクラスタ①を【和歌山県内に新設される助産専攻科への期待】とした。

2) クラスタ②:「助産師」を中心とした共起ネットワーク

「助産師」の周囲に「考える」「進学」「興味」という単語が集まっていた。「興味」の周りに「働き始める」「持ち」「チャレンジしたい」が、「考える」は「進学」と繋がり、「新た」「目標+できる」「学校+ない」「和歌山県外」などが集まっていた。原文から“助産師になりたいと思うが学校が遠いことが壁になる”“進学をあきらめていた人も新たな目標ができる”など和歌山県に助産専攻科ができることで助産師になる目標をもち進学できる期待からクラスタ②を【助産師になる目標をもち進学できる期待】とした。

V. 考察

1. 和歌山県における助産師資格取得と助産専攻科への進学に関するニーズ

今回の調査結果から、全体の約2割の対象者が助産師資格取得を希望しており、進学のニーズが都道府県別に行われた看護職者、看護学生への進学希望に関する実態調査⁵⁾⁶⁾¹¹⁾では全体の約2割の進学希望があったことから、他府県と比較しても決して低くないとい

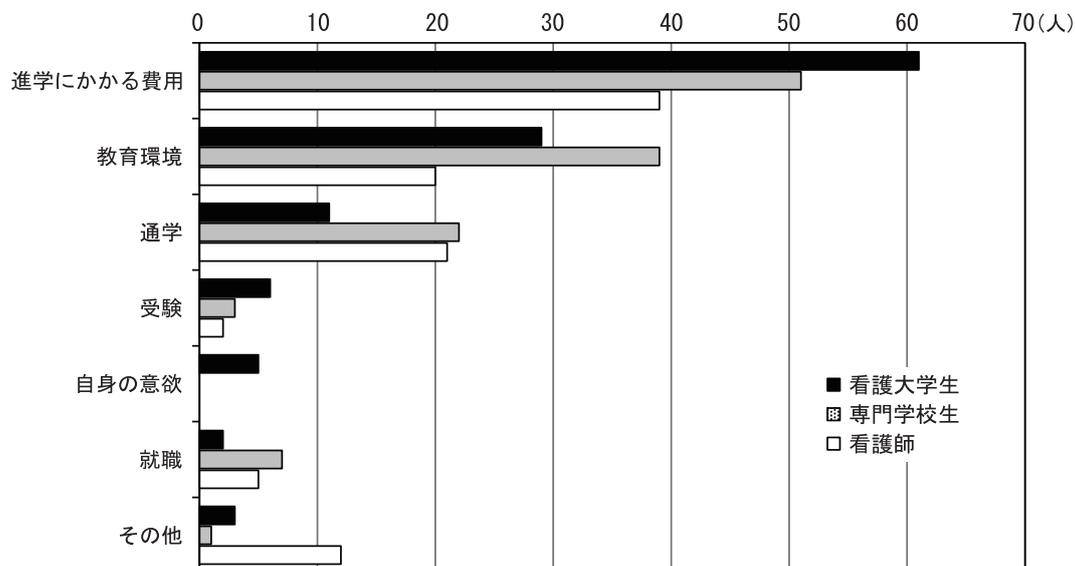


図1 助産専攻科への進学を決める条件

めに進学先の情報収集を行って、進学のための現実的な準備をすでに開始していると言える。さらに、助産師になるために助産専攻科への進学を希望しているものが有意に多かったことは、和歌山県での資格取得が可能な助産師養成校の存在として、先発している養成校が助産専攻科であることが影響している可能性が考えられ、和歌山県内の看護学生にとってなじみの深い選択の一つであるといえる。本調査における看護学生の出身地は9割以上が和歌山県出身であったことから、助産師資格の取得は和歌山県内の進学を希望し、さらに助産専攻科を進学を選択として検討していることがわかった。看護学生が助産専攻科についてさらに理解できるような情報の公開などを積極的にしていくとともに、専門学校生に対しては大学卒業資格を取得できるように、通信制大学での学士取得を紹介するなど進学に対して前向きに取り組むことができる。このことは、中江ら¹⁵⁾は通信制大学により学士を取得した学生への調査では大学の専攻科1年課程への進学や大学院への進学できることが進学後の自信になることを明らかにしている。そのため、和歌山県下の助産専攻科では看護大学生および専門学校生のそれぞれの対象者に応じた情報提供をしていく必要がある。

3. 和歌山県内に助産専攻科が設立されることへの期待

本調査の対象者が示す和歌山県に設立される助産専攻科への期待において【和歌山県内に新設される助産専攻科への期待】と【助産師になる目標をもち進学できる期待】が明らかになった。

1) 【和歌山県内に新設される助産専攻科への期待】

対象者は和歌山県内に助産師養成校が必要に対して少ないと感じていることが示された。このことは和歌山県内の学生や看護師に助産師になるための条件として、和歌山県内の助産師養成校の有無は進学を考えるときに大きな影響因子になると考えられる。和歌山には現在、助産師教育課程を持つ学校は公立大学（定員10名）と公立専門学校（定員10名）である。公立大学の学生の出身地は半数程度が所在県ではない他府県であることが先行研究で示されており⁴⁾、和歌山県でも同様であることが推測される。和歌山県出身者が和歌山県内で助産師教育課程へ進学することは制限されている。

2) 【助産師になる目標をもち進学できる期待】

対象者は助産師になるための進学を希望したとしても、進学先が和歌山県外であるために進学希望を断念する選択を強いられることもあるという思いがあったことが推察される。和歌山県内に助産師養成校がある

ことで、助産師を目指す学生や看護師に目標を持ちチャレンジできる環境を作り出すことは個々の対象者にとって重要なことであり、さらに和歌山県内の周産期医療にとっても貢献できると考える。

VI. 研究の限界

本調査の対象者のうち看護大学生への調査は看護大学1校のみであり、大学生の代表としての意見としては限界があり、看護師の対象者も限定されている。今後は複数校の大学生、和歌山県内に勤務する看護職者や助産師を必要としている医療機関への調査へと対象者を広げて、より多くの進学ニーズを把握していく必要がある。さらに今後は進学を選択肢としての大学院、助産専攻科(別科)、助産学科の3コースの調査を行い、助産師教育ニーズをより詳細に把握していく必要がある。

分析においては、助産専攻科に対する意見ではテキストマイニングでの分析を行ったが単語数が少なく出現頻度を規定することができず、共起関係の強さ弱さなどを明確に示すことができなかった。今後は進学ニーズと助産専攻科を含む助産師教育に対する意見を幅広く聞き、その共起関係を明らかにしていくことや、係り受け関係などを明らかにしていくことで、助産師教育のさらなる発展へ寄与できると考える。

VII. 結論

今回の調査結果から、全体の約2割の対象者が助産師資格取得を希望しており、そのうち看護大学生と専門学校生が9割を越えており、進学を希望している人のほとんどは学生だった。さらに、助産師資格を希望している学生は、希望していない学生より、進学先の候補である助産専攻科の存在やその入学資格について把握しているものが有意に多く、助産師になるために助産専攻科への進学を希望しているものが有意に多かった。

本調査の対象者に共通して進学決定に問題としているものは経済面であり、助産専攻科への意見としての自由記載では、【和歌山県内に新設される助産専攻科への期待】【助産師になる目標をもち進学できる期待】が明らかになった。

Ⅷ. 引用文献

- 1) 厚生労働省 政策統括官付参事官付保健統計室. 2018. 統計表 平成30 (2018) 年医療施設 (動態) 調査・病院報告の概況. 【アクセス2020/02/26】
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/18/dl/04toukei30.pdf>
- 2) 厚生労働省. 2012. 周産期医療体制の現状について【アクセス2020/02/26】
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-lseikyoku-Soumuka/0000096037.pdf>
- 3) 日本看護協会. 院内助産・助産師外来ガイドライン 2018. 【アクセス2021/10/23】
https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/guideline/innaijosan_2018.pdf
- 4) 日本看護協会出版会編. 平成28年看護関係統計資料集 2017; 52-53.
- 5) 川村 千恵子, 池内 佳子. 甲南女子大学の助産師教育課程に関するニーズ. 甲南女子大学研究紀要 2015; 9: 9-18.
- 6) 安田 孝子, 足立 智美, 武田 江里子, 田坂 満恵, 久保田 君枝. 静岡県における助産師教育に関するニーズ調査施設管理者・就労助産師・助産師を志す者それぞれの立場から. 日本看護学教育学会誌 2015; 25: 231.
- 7) 木地谷 祐子, 安藤 広子, 水野 仁子, 金谷 掌子, アンガ ホッフア 司寿子, 蛸崎 奈津子他. 岩手県における助産師教育課程に関するニーズ調査. 岩手県立大学看護学部紀要 2012; 14: 49-59.
- 8) 全国助産師教育協議会. 全国の助産師教育課程一覧. 【アクセス2021/10/6】
http://zenjomid.sakura.ne.jp/about/member_list.html
- 9) 仁坂吉伸. 「和歌山県における地域医療の現状・課題と遠隔医療普及への期待」. 遠隔医療の推進方策に関する懇談会 (第2回) 発表資料2. 厚生労働省. 【アクセス2021/10/8】 <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/04/s0409-7.html>
- 10) 日本産科婦人科学会サステナブル産婦人科医療体制確立委員会. 周産期医療の広場: 分娩取扱施設検索「和歌山県」. 【アクセス2021/10/8】
https://shusanki.org/area/6_30_0?afig=&bfig=
- 11) 石原 留美, 竹内 美由紀, 佐々木 睦子, 野口 純子. A県内で看護基礎教育を学ぶ女子大学生の助産師教育に対するニーズ調査. 母性衛生 2018; 58(3): 334.
- 12) 安河内 静子, 古田 祐子, 佐藤 香代. 大学院における助産師教育に対するニーズ調査. 福岡県立大学看護学研究紀要 2015; 12: 53-62.
- 13) 安達 久美子, 安積 陽子, 岡永 真由美, 高田 昌代. 神戸市看護大学学生における助産師教育に関するニーズ調査. 神戸市看護大学紀要 2006; 8: 25-29.
- 14) 吉田 真奈美, 正岡 経子, 丸山 知子. 北海道内看護学生の助産師教育課程への進学希望に関する実態調査. 北海道母性衛生学会誌2011; 40: 21-26.
- 15) 中江 秀美, 六車 輝美, 佐藤 みか, 北村 弘江, 松田 美穂. 3年課程4年制看護専門学校における通信制大学併修における学生の評価. 四国医療専門学校紀要2021; 2: 37-46.